

②論文要旨（博士後期課程）

論 文 要 旨	
申請者氏名	常智利
申請学位	博士
主論文題目	
日本語前置き表現の総合的研究	
主論文要旨（邦文は4,000字以内 外国語は2,000語以内）	
<b>第一章 序論</b>	
本章では、本研究の研究対象、研究目的および研究意義、論文の構成について述べた。	
<b>第二章 日本語前置き表現に関する先行研究</b>	
本章では、まず、日本語前置き表現に関する先行研究を「『前置き表現』が主対象である研究」と「『前置き表現』が主対象ではない研究」の2種類に大別して概観した。「『前置き表現』が主対象である研究」には、主に「使用場面を限定した前置き表現研究」「前置き表現そのものに関する研究」「前置き表現の対照研究」「学習者の前置き表現習得に関する研究」「定型の前置き表現に関する研究」「ガ/ケド節の前置き表現研究」「『ていうか』類の前置き表現研究」があり、「『前置き表現』が主対象ではない研究」には、「メタ言語表現研究」「注釈表現研究」「配慮表現研究」「待遇表現研究」「接続詞ガの機能に関する研究」がある。	
次に、先行研究に存在する問題点について指摘した。前置き表現の定義、分類や網羅する範囲に対する認識が統一されていないため、日本語前置き表現に関する研究は多種多様ではあるが、まとまりのないものであることを指摘した。	

最後に、第三章以降の方向性について、「定義」「分類」「理論上の柱（ポライトネス理論）」「出 現様式」「表現形式」という5つの部分から前置き表現の全体像を明らかにすることを述べた。
<b>第三章 「前置き表現の定義」について</b>
本章では、「前置き表現の定義」について述べた。
まず、先行研究における前置き表現の定義について検討し、その中に存在する矛盾点や曖昧な 点について述べた。
次に、前置き表現の全般に適用できる定義を目指すために、「前置き表現」から排除する「非 前置き表現」に関する判断基準を提示した。
最後に、これまでの考察に基づき、陳（2018）の提示した前置き表現の定義を踏まえ、改めて 本研究における「前置き表現」を次のように定義した。
前置き表現とは、談話・テキストの形をとらず、中心となる伝達情報を導入するた めに用いられる「情報の送り手の何らかの配慮が込められている」言語表現である。
<b>第四章 「前置き表現の分類」について</b>
本章では、「前置き表現の分類」について述べた。
まず、本研究が多くを負っている陳（2018）の分類を検討した。
次に、陳（2018）の分類を補足する形で改めて分類モデルを立てることとし、本研究で は、前置き表現を機能によって、①「対人配慮型」（「丁重付与」「自己援護」「理解表明」「積 明提 示」「様態表明」）、②「伝達性配慮型」（「話題提示」「情報提示」「目的提示Ⅱ」「情報加 工」）③ 「『対人+伝達性』配慮型」（「目的提示Ⅰ」）の3種類に分けた。
<b>第五章 ポライトネス理論と前置き表現</b>
本章では、ポライトネス理論とそれを適用できる前置き表現について述べた。
まず、「ポライトネス理論」を概観し、「前置き表現の分類」に基づき、ポライトネス理論を 適 用した前置き表現が「対人配慮型」と「『対人+伝達性』配慮型」であり、「伝達性配慮型」は そ れが適用できないことを明示した。
次に、前置き表現の使用実態に関する調査を行った。そこから「実際には、『対人配慮型』で は なく、『伝達性配慮型』のほうが多用されている」ということが分かり、そこで改めて「伝達性 配 慮型」の前置き表現に注目すべきことを主張した。

さらに、前置き表現の後続情報の機能を考慮し、「ポライトネス理論」を使用できる前置き表現を、「ポジティブ・フェイスに対する配慮」と「ネガティブ・フェイスに対する配慮」に分けて分析を行った上で、「ポジティブ・フェイスに対する配慮」が表すものには、「意見の相違」「断り」「不満の表明」「他者へのマイナス評価」「誤解の回避」という5つの場面、「ネガティブ・フェイスに対する配慮」が表すものには、「行動の依頼」「情報の要求」「許可の要求」「不適切な情報の伝達」という4つの場面があることを明らかにした。

## 第六章 前置き表現の出現様式

本章では、前置き表現の出現様式を「話し言葉」（「自由会話」、「特定場面における会話」と「書き言葉」）に分けて述べた。そのうち、「特定場面における会話」の「場面」を「講話」「スピーチ」「記者会見」の3場面に設定した。

まず、「自由会話」における前置き表現の出現様式の特徴を、①「『対人配慮型』の常用的な表現形式」、②「『伝達性配慮型』の常用的な表現形式とその他の表現形式」、③「聞き手による前置き表現と後続情報間への発話挿入」、④「聞き手が後続情報の発信者」、⑤「複数の前置き表現の同時使用と前置き表現の繰り返し」、⑥「『談話のマーカ－＋前置き表現』あるいは『前置き表現＋談話のマーカ－』」の6つに整理して考察した。

次に、「講話」における前置き表現の出現様式の特徴を、①「『話題提示』の前置き表現」、②「『先行文＋前置き表現＋後続情報』という文構造」、③「『こ』系指示詞が含まれる前置き表現」の3つに整理して考察した。また、①～③以外の「前置き表現1＋挿入内容＋前置き表現2＋後続内容」という様式についても検討した。

続いて、「スピーチ」における前置き表現の出現様式の特徴を、①「『こ』系指示詞が含まれる前置き表現」、②「『先行文＋前置き表現＋後続情報』という文構造」、③「談話のマーカ－＋前置き表現」の3点から考察を行った。

さらに、「会見」における前置き表現の出現様式の特徴を、①「『対人＋伝達性』配慮型」、②「自己紹介＋前置き表現」、③「談話のマーカ－＋前置き表現」の3点からを考察した。

最後に、「書き言葉」における前置き表現の出現様式は「談話のマーカ－＋前置き表現」のみであることを述べた。

これらの考察から、話し言葉における前置き表現の出現様式は、場面によって同じ特徴を持つ場合もあるが、各場面の固有な特徴も存在することがわかった。また、「自由会話」に見られる前置

き表現の出現様式が最も豊富である理由は、自由会話には場面や会話内容などによる制限がなく、会話の自由度が高いことによることが示唆された。さらに、書き言葉に特有の1つの出現様式は、伝達性に配慮するほかに、レポートや論文の論理性の向上にも役立っていることについて述べた。

## 第七章 前置き表現の表現形式

本章では、前置き表現の表現形式を「話し言葉」と「書き言葉」に分けて考察を行った。これまで、前置き表現の表現形式に関しては、「すみませんが」「簡単に言えば」のような「節」形式が一般的だが、今回の調査では、それ以外の形式もあることが分かった。「話し言葉」では、場面を問わず適応する形式もあれば、特定の場面にしか適応しない形式もあった。また複数の種類の前置き表現に用いられる形式もあれば、特定の種類にしか用いられない形式もあることが分かった。そして、「丁重付与」の前置き表現として、従来の研究では、「～けど（が）」節が検討されてきたが、今回の調査で、実際のコミュニケーションでは、「言い切り型」形式が「～けど（が）」節より多用されていることもわかった。また、「書き言葉」に現れた表現形式の中では、「～が」「～と」「～ように」「～とおり」「～について」節が対応する前置き表現の種類がそれぞれ1つに限られた。さらに、「話し言葉」では、「～けど（が）」節が、「書き言葉」では「文」形式が最も使用されていることが分かった。

## 第八章 結論と今後の課題

本章では、第一章～第七章を振り返りながら結論をまとめ、今後の課題として「学習者の母語の影響」や「日本語教育での提示方法」を挙げた。